

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同研究プロジェクト「アジア・アフリカ地域におけるグローバル化の多元性に関する人類学的研究」2010年度第一回研究会 報告

2010年5月16日（日）13:00-18:00

場所：AA 研セミナー室（301）

「パレスチナ・ディアスポラ —移動のグローバル化とナショナル・アイデンティティ—」

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 錦田愛子

英文タイトル：Palestinian Diaspora: Their Globalized Migration and National Identity

1948年戦争（第一次中東戦争）によるイスラエル建国を受けて、出身地を追われたパレスチナ人は、以来60年以上の長期にわたってディアスポラの状態に置かれてきた。移動先の地理的範囲はグローバルな規模に展開し、そうした状況はパレスチナ人の中でのナショナル・アイデンティティに大きな影響を与えている。本発表で報告者は、このように移動によって存在形態のあらゆる側面が規定されるパレスチナ人を取り上げることで、グローバルな離散がもたらす影響を事例に沿って描出した。またそれらをより適切に分析するために、移動にまつわる諸概念の再整理を試みた。

移動に関する主要な概念としては、グローバリゼーション、トランスナショナリズム、ディアスポラの3つが挙げられる。報告者はまず、それらの概念がそれぞれの学問領域で論じられてきた経緯や、これまでの議論の展開を概観した。次にこうした議論の中で共通する要素を探り、それを国家の存在、ナショナリズム、世界システムの「中心」「周辺」論という枠組みであると指摘した。つまりこれら後者の3つの要素を鍵に分析することで、グローバル化の事象について、既存の議論枠組みを超えたより柔軟な事例分析が可能になると考えた。

具体的な分析対象としたのは、報告者が2003年から2005年にかけて主に調査を行ったパレスチナ自治区およびヨルダン在住のパレスチナ人の移動である。はじめにパレスチナ人の離散のグローバルな展開を、歴史的経緯や人口割合によって示したのち、具体的にどのような移動の例が見られるのか、時期ごとの傾向や、目的別の分類を行ない、それぞれについて事例を示した。パレスチナ人の離散は、イスラエルとの間での紛争に起因するものが大きな割合を占めるが、そのほかに経済的な要因で移動する場合も多い。1920～30年代からみられた欧米諸国への出稼ぎや、その後の経済移民がそれにあたる。彼らは就業の傍ら、滞在国での身分証明書やパスポートの取得にも努める。より安定的な法的地位の獲得は、親族間でのグローバルなネットワークの構築や、トランスナショナルな移動を更に促進していく。移動の方向性は、概して「周辺」から「中心」へ向かうものだが、その陰には市民権という国家が生み出した制度をコミュニティ・レベルでの連帯の目的で柔軟に利用していこうという戦略が指摘される。ま

た移動先での同郷集団や集住地区の形成は、「周辺」に発する地域コミュニティに独自の秩序を維持しようとする試みと考えることができる。

このようにパレスチナの場合、グローバル化した移動の背景には親族を中心としたコミュニティの維持・再生の動きがある。それはディアスポラの状況の中でも根強いナショナル・アイデンティティを発達させる契機となっている。グローバル化はこれら多種多様な方向性で同時進行する移動を含みこんだ現象であり、各地域の文脈において分析することが重要である。

「グローバル化のなかのマレー・ディアスポラ運動」

静岡県立大学 富沢寿勇

1. マレー人を定義づける諸潮流

前植民地期の東南アジア島嶼部では、マレー (*Melayu*) 人概念の使用脈絡は、主にムラカ海峽周辺の王朝出自とのつながりに基づき、王権とイスラームを指標とする潮流、および、ムラカ海峽を超える交易圏で育まれた慣習、言語、商業慣行を維持した商業ディアスポラとの関連に基づき、言語 (マレー語) と慣習を指標とする潮流があった。植民地期マラヤになると、「マレー人」は言語 (マレー語) ・王権 (スルタン) ・宗教 (イスラーム) を指標として定義され、このような植民地的知識が公式化されて行く。このようななか、20世紀前半には、民族 (*bangsa*) としてのマレー人を再定義する多様な潮流が展開した。まず同世紀初頭には、出生地 (現地生まれ) と宗教 (イスラーム) を指標にするもの、続いて、これら2要素に出自・血統を追加して「生粋のマレー人」に限定するもの、さらに1930〜40年代のムラユ・ラヤ運動に見られたように、マレー人をマラヨ・ポリネシア (オーストロネシア) 語族と同義にとらえ、ジャワ人、台湾先住民、マダガスカル島民などを含めてとらえるものなどである。独立後のマレーシアでは、政府によるマレー人の公式定義 (マレー語を習慣的に話し、イスラームを信奉し、マレーの慣習に従う者) で植民地的知識が踏襲される一方、上記の最広義の潮流を汲んだマレー世界運動が近年併行して展開している。

2. マレー世界・ディアスポラ運動の展開

ここでは、GAPENA (マレーシア国民文筆者協会。1969年結成) を中心に、1980〜90年代以降展開されてきたマレー世界 (*Dunia Melayu*) 運動／マレー・ディアスポラ運動を通じて、そこにマレー人の定義づけの諸潮流がどのように介在しているかを分析し、その現代的意味を明らかにする。運動の経緯は、1982年に第1回マレー世界シンポジウム (ムラカで開催) でスリランカ在住のマレー人が「発見」されたのを契機に、東南アジア島嶼部の外部に存在する「根っこを共有するマレー人種」 (*rumpun Melayu*) で世界に散在するマレー・ディアスポラへの関心が急速に高まり、1990年代以降、ヴェトナムのチャンパ、南アフリカのマレー人社会、マレー人の原郷としての中国・雲南訪問、国際マレー事務局設置と続く。1996年には「マダガスカル・マレー人」 (メリナ人) と交流が開始され、翌年にはマダガスカル・マレー

人協会も結成される。この間、マスメディアも活用されドキュメンタリープロジェクトによって、世界各地のマレー・ディアスポラも紹介された。ここには、グローバリズムの荒波からマレー人を守り、エンパワーし、世界に広く散在するマレー人の人的資源のネットワークを構築・再構築していく運動の側面がある。

3. マレー・ディアスポラ運動におけるマレー人の明示的定義

同運動で公式に打ち出されてきたマレー人の定義は、「マラヨ・ポリネシア（オーストロネシア）語族」全体を包摂する最広義のものであり、したがって原理的にはマレー人をイスラーム教徒に限定せず、あらゆる宗教を包摂するものにとらえる方向性を持つ。ただし、このような明示的定義にもかかわらず、以下に示すように、同運動ではマレー概念をめぐる既存のさまざまなイデオロギー潮流が、異なる社会文化的脈絡に応じて取捨選択されながら、複合的な展開を示している。

4. 認識論次元で作動するマレー人の構成要件

現代のマレー世界・ディアスポラ運動の水面下で作動するマレー性（Malayness）についてのイデオロギー潮流・認識論的枠組みと、社会文化的脈絡との関係は、以下のように整理される。

（1）宗教（イスラーム）の側面

世界に分布する3億5千万人のマレー人口の85%がムスリムとされるが、同運動は、宗教次元では論理的にムスリム・非ムスリムを包摂するもので、イスラームという宗教的な条件は、マレー人の指標とされることもあるが、されないこともある。イスラームがマレー性の指標として顕在化するのには、フィリピン南部などのようにムスリムがマイノリティであり、非ムスリムの多数派と近接して生活するケースである。

（2）言語・慣習の側面

他方、ムスリムが多数派・支配的集団を構成しており、宗教の要件が前面に出ないケースとして、中東のアラブ社会に居住するマレー人などがあり、そこではマレー性の柱の一つである「言語・慣習」の指標が顕在化し、アラブ人との差異化が見られつつ、世界に拡散したマレー人同士の連帯感が強調される。

（3）王権パラダイム

マレー性を構成してきた王権指向のイデオロギー潮流または王権パラダイムは、マレーシアのマレー人によるヴェトナム・古代チャンパ王国遺跡やチャム族訪問、マダガスカル・マレー人とマレーシア・マレー人との交流などにおいて顕在化している。特に後者については、マラヨ・ポリネシア語族の水平軸のつながりを、王権パラダイムという階層的、垂直軸で補強している側面がある。

5. 結論

明示的でフォーマルな言説レベルでは、マレー世界・ディアスポラ運動は、最広義のマレー性のイデオロギー潮流(マラヨ・ポリネシア/オーストロネシア語族)の軌道に沿って展開し、水平軸での民族的広がりを目指すが、同時に、王権パラダイムという階層的な垂直軸での共通性が多地域間で強調される時、マレー人概念は、更に奥行きを与えられるものになる。総じて、マレー世界・ディアスポラ運動は二重のヒエラルキー構造を持つ。すなわち、王権パラダイムによる社会階層のヒエラルキー、および、マレー世界の中心(中核世界としてのヌサンタラ/東南アジア島嶼部)と周縁(世界に散在するマレー・ディアスポラ)のヒエラルキーである。この二重のヒエラルキー構造を背景にしながら、マレー性を共有する同胞の探索・交流・ネットワーク形成は、多様な社会文化的脈絡に応じて、さまざまな既存の指標が顕在化したり、潜在化したり、新たに組み合わせられたりしながら進行しているのである。